

四天王寺前駅の最寄りの観光地といえば

四天王寺

だよね～。

松本香代・誠司

四天王寺は593年、聖徳太子によって建立されました。当時の政事を中心は奈良であり、この地は辺境の地であったことでしょう。しかし海外（朝鮮・中国）の優れた文化を吸収しようとする聖徳太子は、海外に少しでも近い、港のあるこの地に寺を建立し、文化の中心にしようとしたわけですね。この作戦は実に理にかなっているといえましょう。

さて四天王寺が他の寺と比べて誇れることといえば、ずばり四天王寺式伽藍配置ですね。がらんとしているから伽藍配置というのではありません。☺スミマセン。がらんだ語源は伽藍堂というのが定説のようです[掲載後訂正]塔・金堂・講堂が一直線上に並んだ、平面図にしやすい配置のことをいうのです。中で迷子にならないばかりでなく、正面から見た景観は整然とした美しさを持っているのです。海外からやってきた使節に対する誇示であるとも言えましょう。

そしてもう一つ、四天王寺の特徴は、他に類をみないほど何度も火事にあっていること。創建以来、少なくとも3度、焼失している。資料がないので年代ははっきりしないが、一度目は600年代(?)に原因不明の火災。2度目は織田信長によって焼き討ち。そして3度目は第二次世界大戦中空襲による焼失。しかしこれだけ焼けまくったにもかかわらず、そのつど無事復元されるあたり、しぶとい。宗派を越えた支持があるということでしょう。とにかく燃えても燃えても、聖徳太子の伽藍配置は守り続けられてきた。境内全域が史跡として指定されているのだ。これは生半可な気持ちでは取材できんぞ。



石の鳥居

地下鉄四天王寺駅から四天王寺に向かうと西門から入ることになる。

伽藍配置を真横から見る格好になり、もっともカッコよく見える向きだ。ここには石でできた大鳥居がある。これは、でかいだけでなく歴史も古く、日本三鳥居の一つに数えられているのだ。もちろん重要文化財だ。

極楽門

門をくぐろうとすると、柱に船の舵のようなものがいくつか取り付けられている。

みんなぐるぐる回していく。これはチャクラというのだ。

風の強さを知るための風力計……ではもちろんない。

特定の方向に、特定の回数だけ回せば、とある仕組みが動き出す……というわけでもないらしい。

本来の目的は…？



中門(仁王門)

伽藍の南端を担う門。

2体の仁王像が守っているなので仁王門と呼ばれている。

筋骨隆々の仁王像は身長 5.3m、体重 1 t で現在全国第 2 位の大きさだそう。ちなみに第 1 位は奈良の東大寺。

大阪代表、四天王寺さん、がんばって日本一になってくださいね。

「うん！」 「あぁー。」

お二人とも力強いお返事でした。



亀の池

亀の池にはその名の通り、大量のカメが生存します。カメはヘビやワニと同じは虫類で、肺呼吸をします。ですから池の中にズーと潜りっぱなしというわけにはいかず、たまに頭を水上に出してくるわけですね。

池の中央部にある島の部分には多くのカメが上陸しておりました。ひなたぼっこでしょうか、まさに甲羅干しですな。さらに池の中から何匹か上陸を企てています。しかしそういった後発のカメたちは、すでに上陸している他のカメに阻まれてなかなか上陸できません。また他のカメがいないところでも、段差があるために前足がのっても自分の体を持ち上げることができず、再び水中に沈んでしまうカメもいます。見ていて泣けてきます。



われわれはそういったカメたちに「もっと右側の段差の低いところに回ってみたら」とか「四肢に体重を均等にかけて」とかの確で親身になったアドバイスをいたしました。そのせいあってか、何匹かのカメたちは無事上陸を果たしました。お礼に竜宮城までいかがですか、といいだすカメもおりましたが、この後も取材がありましたので、鄭重にお断りいたしました。

石舞台

亀の池には池を二分するように大きな橋が架かっています。その橋の真ん中はステージになっていて、石でできているので石舞台といえます。こういうのがあると必ず取材陣の中にはパフォーマンスを披露する者がいるのですが、さすがは四天王寺。我々の行動を先読みするかのように「踊ってはいけません」という趣旨の看板が。じゃあ登るのはいいのかというと、「登ってもいけません」と、またしても先読み。さすが 1400 年の歴史を誇る古寺だ。赤子の手をひねるようにあしらわれてしまったな。



六時堂

北の端・六時堂には「おもかる地蔵尊」というものがあつた。願い事を思い浮かべながら持ち上げてみて、予想より軽ければ願いは成就するという地蔵らしい。

説明文の「台座ごと持ち上げてみて重く感じれば…」という部分を読んで、机ごと持ち上げようとする者が出現。さすがに持ち上がらなかった。地蔵の下に敷いてある台座のことだったのね。

それにしてもこの地蔵の重さは何を基準にして決められたのだろうか。できれば体重によって 50 kg 級、60 kg 級とか、地蔵を使い分けて欲しいと思うのは私だけであろうか。ひげオヤジは頭をつかんでも持ち上げることができると豪語していたが、首が抜けそうなので止めたと言っていた。首抜けたら縁起悪いわな。



万燈院

ドラクエなんかだと教会へいくと毒消しをしてくれるものだが、ここ万燈院でも、木槌で自分の悪いところをさすれば、それが治るといふ。

たいへんありがたい場所ですな。

ただ、一回で治るといのは虫が良すぎる話で、何度も通わないと御利益がないらしい。毎日通ってるぜ、とか、食事の前に必ず！といった万燈院フリークのためにマイステック置き場も用意されている。

回廊

五重塔・金堂・講堂は回廊で取り囲まれており、有料だ。

回廊の柱はエンタシスというやつだろうか、下膨れの形状をしている。



五重の塔

塔は様々な理由で焼けまくっており、現在は第九代目だそう。靴を脱いでスリッパに履き替え、登る上る。39.2mの高さがある。

上に行くほど狭くなっていくので先端恐怖症の方には拷問といえよう。最上部からの眺めはよいが、なかなかハードな登りだ。

日食

五重の塔のあたりで外国人の団体とすれ違った。五重の塔の反対方向の空を指さして、何やら言い合っていた。天下の五重の塔に興味を示さず、あさっての方向をみるとは、しょせん外国人にとっては、この四天王寺など変わった建物のある観光地という程度の認識なのだろうと思っていた。

が、実はこの日は日食で、彼らはちょうど欠けていた太陽を眺めていたのだった。我々取材陣の中には中学校で理科を教えている者もいたはずだが、全くそういうことが話題にならなかったというのも不思議なことだ。

国際仏教大学

国際基督教大学（ICU）というのが、関東にあるが、大阪はその向こうを張って国際仏教大学でい。しかも略称もITUでい、べらんめい！イギリスにも分校があるんだぜ。（しかし妙な宗教団体と同一視されてたらヤだね。）

釣鐘饅頭

〇さんがやたら紹介するので、みんなで釣鐘饅頭を食べた。紅葉饅頭などと同じ、カステラの中に餡が入っているオーソドックスな饅頭だ。かなり甘かった。

四天王寺には昔、厚さが1mはあろうかというチョー大きな釣り鐘があったそうで、饅頭はそれを模して作ったんだそうだ。しかしその釣り鐘は戦争に供出して今はない。戦後50年たっても復興する気配がないところを見ると、そう大事なものではないのかもしれない。



講堂

仏さん ぶつぶつしてるね ほっとけー (オヤジギャグ炸裂川柳)。

講堂ではご本尊の阿弥陀仏如来座像の頭部に注目してみよう。そう、粘土色というか青カビ色というか、青緑色の丸いぶつぶつがフジツボのようにびっしり植えてあるね。あれ気持ち悪いと思わんか？ 筆者は強くそう思うぞ。もし自分の頭があんなだったら、搔きむしりたくなると思わんか？

でも搔きむしったら搔きむしったで、あのブツブツがぼろぼろとこぼれ落ちてきて（……書いてて気持ち悪くなってきた）。

これって磯のフナムシの大集団とか、爪楊枝のかたまりを上から見たときとか、似たような恐怖を感じるよね。もしかして大仏様のお顔をみるのも畏れ多いと感じるのは、ぶつぶつの恐怖が一因なんじゃないかな。きっとそうだ。

さらに十一面観世音像の背後のついたて（光背というそうだ）にも、小さな仏様が、これまた「びっちり」と貼りつけてある。これも間近で見たときはゾクゾクして搔きむしりたくなつたぞ。

ちなみにこの仏さん大集合、千躰仏といい、信徒の結縁によるもので、一つ一つが違う顔になっている。それもまた気持ち悪いい〜。

(四天王寺の項、おわり。……仏罰御免。)